

# 固定運動遊具による

## 幼児の遊びの発達についての実験的研究 (1)

岡 本 卓 夫

### ☆ 研究の目的

子どもの生活は“遊び”の生活といわれる。目がさめている間中、“ちっともじっとしていない”という生活は、歩行の始まる頃からおこり、一番活発になるのは、三、四才頃からである。この頃になると、特に、とんだり、はねたり、走ったり、あるいは石を投げ、ボールをけり、家の内外をとわず、きわめて活動的、活発な身体運動的遊びに、彼らは夢中になる。

かかる活発な身体運動的遊びこそは、急速に伸びつつあるこの期の幼児本来の姿であり、彼らの真の生活なのである。かような遊び、かかる欲求を十分に満足せしめることによって、はじめて、彼らの心身の健全な発達は期待される。

かかる身体運動的遊びに対する必須の遊具として、ずっと以前から広く普及しているのはすべり台、ぶらんこ、低鉄棒などの固定運動遊具である。だが、きわめて高価なこの固定運動遊具も、これが

使用法や遊び方にいたっては、教師は子どものなすがままに放任し、あるいはけがしてはとか、けんかになつてはとかのけ念から、かえつてこの遊びを抑制し、あるいは禁止をさえる実状にある。

最近、交通機関の発達によるけがや事故死が激増してきた。それは、子どもたちに安全な遊び場がなく、危険な街頭や道路や線路はたで遊ぶからだとの理由で、すべり台、ぶらんこ、あるいは低鉄棒などの固定運動遊具を備えつけた遊園地づくりが、いたるところに見うけられるようになった。だが、問題はいぜんとして解決されない。彼らは、はじめのうちこそ、それを珍しがって夢中で遊んでおるが、しばらくするとあいてきて、また元の街頭や道路や線路ばたにとびだしてしまう。

つまり、彼らは、かかる運動遊具の使い方、遊び方をほとんど知らない。すべり台には、のぼつただすべり下りるだけのこと。ぶらんこには、乗つて単にぶらんこするだけのこと。だから、あまりにも単調で、すぐにあいてしまうのである。

だが、遊び方によって、そこに、幼児は幼児なりに創意とくふう、ドリルとトレーニングが要求され、あらたなる興味が、つきつぎとよび起され、彼らは、いつまで遊んでもあくことを知らない。

「立すべり」「ふりだしとび」などは、その一例である。

かくて、幼稚園・保育所、地域社会をとわず、彼らの活発な身体運動的遊びに対する欲求を満足させ、体育的・教育的効果をねらうには、それらの遊び場を、誘引働きわめて高き場たらしめるの一事につきよう。そのためには、いろいろの遊具を完備しておくことも必要ではあるが、遊具の種類はたとえ少なくとも、彼らの発達や個性に即応したそれらの使い方、遊び方の指導こそ、より根本的に重要な使命といえよう。

遊具の使い方、遊び方を知ることによって、それら遊具の誘引性はいちじるしく強烈となる。彼らは、この場の引力に強く引きよせられ、その遊びはきわめて活発となり、欲求満足はもちろん、体育的・教育的効果がここに期待される。

かようなことから、筆者は、幼稚園・保育所はもとより、遊園地や各家庭にさえ広く一般的に設備されている固定運動遊具によるのぞましい遊び方とその指導法を探究し、かかる面から幼児教育に寄与せんとし、まず今回は、固定運動遊具による子どもたちの自然遊びを観察し、その種類や様子を年令別に、具体的に調査することにした。

## ☆ 研究方法

### 一、実験園(所)

徳島市内および郊外地の幼稚園三、保育所二。

### 二、被験児

前記の園(所)に登園する四才児男・女各二五名、五、六才児の男・女各五〇名。

### 三、使用遊具

すべり台(伸びきりあるもの)、ぶらんこ、ジャングルジム、低鉄棒、遊動橋、固定円木、シーソー、雲梯、太鼓橋、はん登棒の一〇種。

四、実験期日

昭和三二年一月一四より

昭和三三年三月二〇日まで。

### 五、実験方法

それぞれの年令に対し、第一表に示すとき構成人数(ただし、四才児は五人組まで)編成組数をつくり、それぞれの個人およびグループに対し、「Aちゃん(みなさん)

第 1 表

編成組数 構成人数		10					
		5	5	5	5	5	
男	児 組	1	2	3	5	8	10
女	児 組	1	2	3	5	8	10
混 合 組	男		1	2	3	4	5
	女		1	2	3	4	5

今からAちゃん(みなさん)だけで、この遊具(指小)で遊ばせてあげますから、しつかり遊びなさい」と命じ、それぞれの固定運動遊具で三分間ずつ、自由に遊ばせ、その間に、遊びの様式の観察と、遊びの種類およびその出現回数・時間とを所定の用紙に記録あるいはマークしていった。

### ☆ 結果および考察

#### 一、すべり台(仲じきりあるもの)

#### 四才児

ひとりの場合、男女児とも上にあがるや、周囲を見回し、ゆつくりしゃがみ、自分の足元を見ながら注意深くすべっており、第二表に示すごとく、きわめて単純な遊びをくりかえす。

二人、三人とグループの人数が増加しても、それには関係なく、男・女・混合いずれの組も、それぞれ自分勝手に遊び、その動作はきわめて緩慢である。

#### 五才児

ひとりの場合、四才児に比し、その動きは活発となり、すべるにも手・足でこいだり、あるいは梯子をかけあがっていく子どももでき、単純なすべり方から複雑なすべり方へうつっていく。

二人、三人とグループの人数が増加してくると、男・女混合いず

第2表 ひとり遊びの種類と平均出現回数

遊 び の 種 類	年 令 性	4 才		5 才		6 才	
		男	女	男	女	男	女
長 座 す べ り		4.6	4.3	6.4	6.2	2.3	7.7
仰 向 す べ り				0.8		0.6	0.5
後 向 座 位 す べ り				0.2		0.2	
仲 じ き り す べ り	前 向				0.3	1.0	0.2
	後 向			0.2	0.8	1.0	0.5
伏 臥 す べ り	頭 上 位			0.2	0.1	0.7	0.6
	頭 下 位				0.1	0.8	0.2
立 す べ り				0.1		0.7	
躡 躑 す べ り						0.5	0.5
手 摺 す べ り						1.0	
歩 き お り						0.1	

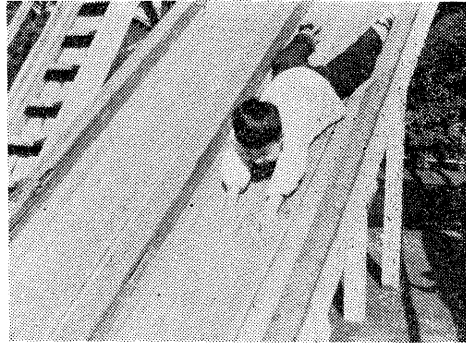
第二表に示すごとく、いろいろな方法ですべて遊ぶ。

#### 六才児

この年令になると、ひとり遊びでも、男児はきわめて活発に遊び、第二表に示すごとく、五才児よりさらに多種多様なすべり方をし、スリルある遊びを好む。女児は、男児ほど多彩な遊びはしないが、やはり五才児より活発である。

れの組でも、その活動はひとりのときより活発となり、はじめの二、三回は先を争つて最も速くすべれる方法ですべるが、すぐに疲れ、その後、各自のペースで

第1図 伏臥すべり(頭下位) 6才男児



第2図 伸じきりすべり(後向) 6才男児



二人、三人とグループの人数が増加しても、男・女・混合いずれの組も五才児とほとんどかわらないが、ただ、女児組の場合、「手つなぎすべり」「背負すべり」をしたのが二組みられた。だが、かような遊びも、次々と後からすべってくる子どもにじゃまされてか、それぞれはじめに一、二回おこなわれたにすぎなかった。

二、ぶらんこ

四才児

ひとりの場合、まず最初は、男・女ともぶらんこに腰かけるや、後

第3表 ひとり遊びの種類と平均時間

遊びの種類	性	4才		5才		6才	
		男	女	男	女	男	女
腰かゆり	ゆり	2'04"	2'14"	2'01"	1'49"	1'13"	1'18"
立し	ゆ	18"	22"	40"	54"	1'05"	1'29"
しが	み				5"		
腹か	ゆり					6"	
ふり	し					23"	
く	る	3"					
その	の	35"	24"	19"	12"	13"	13"

へいっばいにひき、しかるのち、足をはなしてゆりだす。上体あるいは下肢によるはずみは全く利用せず、ゆれが小さくなると、いったん足でささえてとまり、再び後へひいてゆる。多くの子どもが、かような単純な遊びをくりかえす。また、少しの間なら「立ゆり」もできるが、上体と下肢のアンバランスのためにゆれているといった状態である。

二人組になると、男・女・混合いずれの組も「二人ではのれんわ」といい、結局、性格の強い、活動的な子どもが先にのり、ひとりで遊び、一方の子どもは、自分勝手に他の遊びにうつる。

五才児

ひとりの場合、はじめのゆりだしは四才児と同じだが、彼らのごとく、途中でとまることはなく、上体あるいは下肢のはずみをきかせて連続的にゆる。「立ゆり」をするには、まず「腰かけゆり」で大きくゆり、ゆりながら片脚ずつのせ「立ゆり」に

第4表 2人遊びの種類と平均時間

遊戯の種類	年令		5 才			6 才		
	性		男	女	混	男	女	混
立位腰かけ位交代 2人のり						47"	2'00"	36"
向き合い腰かけのり						13"		
向き合い立のり			39"	33"	28"	26"	11"	40"
一方が立ち、他方が 腰かけて2人のり			52"	1'03"	38"	24"		58"
交代1人のり						26"	22"	
その他			1'29"	1'24"	1'54"	44"	27"	46"

第5表 3人遊びの種類と平均時間

遊戯の種類	年令		5 才		6 才	
	性		男	女	男	女
3人のり			54"	26"	1'04"	42"
交代2人のり			26"	42"	40"	33"
交代1人のり					14"	36"
その他			1'40"	1'52"	1'02"	1'09"

うつつ。もちろん、その逆もでき、全般にゆりは大きく、安定性がでてくる。

二人組の場合、ぶらんこにいくや、男・女・混合いずれの組も、性格の強い活動的な子どもが先にぶらんこをとり、リーダーとなつて、自分のゆりたい方法で位置を占め(例えば、立位、腰かけ位な

ど)、一方の子どもは、それと反対かあるいは同じ姿勢をとつて向かい合い、交互に上体あるいは下肢のはずみをきかせてゆる。もし、途中でゆり方をかえるときは、リーダーが指示し、その遊びにうつる。

三人組の場合、男・女いずれの組も、やはりひとりのリーダーが先にぶらんこをとる。だが、他の二人も乗ろうとするので、その子どもだけではのれず、結局、三人が乗ったり、下りたりし、約一分くらいかかって三人のりになる。三人がゆるうとするがコンビがとれないのでうまくゆれず、終に、その中のひ弱い子どもが下り、残った二人でゆる。中には、機をみて、下りた子どもに交代をいうリーダーもいるにはいるが、それも一回程度にとどまり、多くは二人で遊び、三人では遊ばない。

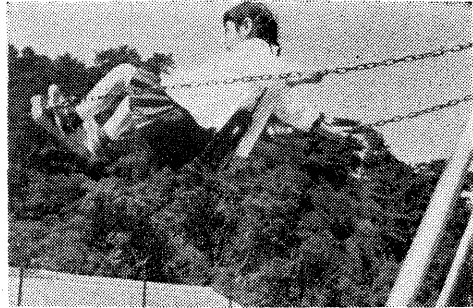
五人以上のグループになると、一般に、活動的な子ども二、三人がぶらんこの取り合いをし、他の子どもは、その周囲で見ている。結局それら二、三人の子どもがのって遊び、他の子どもは、ぶらんこをはなれ、自分勝手に好きな遊びにうつる。この傾向は、特に男児にいちじるしい。

### 六才児

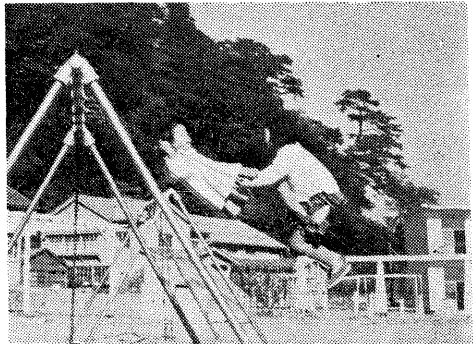
ひとりの場合、そのゆりだしは、四、五才児のごとく、後へいっばいにひくが、強く蹴りはなすので、最初からその振幅は大きい。多く

註「3人のり」はひとりが腰かけ他の二人が向き合つて立つ方法。

第3図 立ゆり 6才女児



第4図 二人のり 5才女児



は、そのまま続いて二、三回大きくゆり、ゆりながら「立ゆり」にうつる。そして五、六回ゆったら、また「腰かけゆり」という具合に、大きくゆりながらこれらをくりかえす。くりかえしているうちに、第三表にも示すごとく、特に男児においては、平均二回「ふりだしとび」をおこない、五才児や女児には見られないスリルある遊びをする傾向がある。また、この年齢になると、「立ゆり」をするのに、最初からぶらんこを手前にひき、片脚をのせ、他方の脚で蹴ると同時にゆりだす子どももでてくる。

二人組になっても、男・女・混合いづれの組もその様式は五才児

に似ておるが、二人のコンビはますますじょうずになり、したがってその振幅もひとりのときよりは大きく、スピードもある。特に五才児と異なる点は、第四表にも示すごとく、二人が交代して、のったり下りたりしていることである。この場合、すべて性格の強い、活動的な子どもが指示しておる。

三人組になると、男・女いづれの組も、リーダーがあらわれ、「お前腰かけ」、「あなた立って」などの指示を与え、三人のりをし、それでしばらく遊ぶ。だが、うまくゆれないので、またリーダーが、「お前下りて押せ」、「ひとりずつ交代しよう」などの指示を与え、第四表に示すごとき遊び方も五才児より合理的である。

五人以上のグループになっても、やはりリーダーがあらわれ、誰が先になるかについて相談する。それぞれ「僕（私）が先だ」ともめておるが、結局、多くの場合、じゃんけんによって、それも四、五人の子どもで順番を決めている。一番が決まれば、その子どもはただちにのって遊び、他の子どもたちは、ひき続きじゃんけんをし、順位をきめて一応はならぶ。だが、なおも押しつけ合いをして先を争うことがしばしばある。一方、じゃんけんにいれてもらえなかった子どもたちは、もはや、そこでは遊べずとわかってか、自分勝手に他の遊びへうつる。また、遊んでいる子どもも、なかなか順番がまわってこないで、ひとり、二人と減っていく、みんな遊ぶ時間はきわめて少なく、結局、活動的な、性格の強い子ども一、二人が残って遊ぶだけになる。

(徳島大学)